

令和元年6月14日現在

機関番号：32689
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：15K21557
研究課題名(和文) 翻訳の歴史性と歴史批判機能：20世紀フランス・ドイツにおける思弁的翻訳論の研究

研究課題名(英文) Speculative Translation Theory in the 20th Century France and Germany:
Historicity and Criticism of History

研究代表者
西山 達也(Nishiyama, Tatsuya)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：40599916
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀のドイツ・フランスを中心に広まりをみせた翻訳をめぐる諸思想(思弁的翻訳論)が、(1)いかなる歴史性の概念とこれに関連する諸々の基礎概念(時間性・事実性・生)を前提として展開したのか、また、(2)この諸思想が人文学の様々な領域における歴史研究の潮流と相互に影響しながら、どの程度まで歴史性の概念を批判・吟味したのかを解明することを試みた。以上の研究を通じて、翻訳の実践によって可能となる概念と主体の歴史的な形成・変容をめぐる理論の基盤をえることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、20世紀のフランス・ドイツにおける翻訳をめぐる様々な思想を、とりわけその背景にある歴史哲学的な前提に注目しながら調査した。翻訳とは単に複数言語間の記号表現を相互に置き換える行為ではなく、歴史を形成するとともに歴史を変革する行為である。こうした翻訳の営為をめぐる思弁的考察は、従来の哲学研究や思想史研究においては主要な課題と見なされてこなかった。本研究は、思想の受容や継承が有する変革の可能性を積極的に評価することで、言語の多様性のうちに潜む肥沃な可能性を解明し、人間と言語の関係を巡る現代的な状況に対して実践的に応答を試みるものである。

研究成果の概要(英文)：This research explores how French and German thinkers in the 20th century conceived and developed a “speculative philosophy of translation,” based essentially on historicity and other related concepts; such as temporality, facticity, and life. This research also elucidates the extent to which such a speculative philosophy played a significant role in criticizing the concept of historicity while interacting with the tendencies of historical thought in various disciplines of human sciences (philology, hermeneutics, linguistics, literary theory, and theology). The results obtained formed the basis for constructing a theory of historical change through the formation of concepts and transformation of subjects, made possible by the praxis of translations.

研究分野：哲学

キーワード：フランス哲学 ドイツ哲学 翻訳の思想 ハイデガー ブランショ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

普遍的コミュニケーションの理念に基づいて構築された哲学において、翻訳の問題は、理論と実践の境界に位置する副次的で曖昧な事象という性格を与えられてきた。しかしながら、そもそも哲学は、先行するテキストや概念を伝承・継受するにあたって、たえず翻訳を遂行し、ときには既存の翻訳を批判し、新たな翻訳を提示することで、思考の体系そのものに変革を生じさせ続けてきた。哲学者マルティン・ハイデガー(1889-1976)は、思考そのものを生成させ変革する翻訳作用を「思弁的翻訳」(denkende Übersetzung)と呼び、その可能性を探究した。

20世紀の哲学・思想史においては、ロマン主義の批評理論と言語哲学の伝統を引き継いだヴァルター・ベンヤミン、言語学者のローマン・ヤーコブソン、解釈学の泰斗ハンス＝ゲオルク・ガダマー、「脱構築」の哲学者ジャック・デリダらが、それぞれ、言語思想の基礎づけの根本において翻訳の問いを提起しているが、これらの先駆者たちの洞察を引き継ぎつつ、より実証的なたちで展開する研究も現われはじめている。たとえばフランスの思想家アントワヌ・ベルマンが1980年代以降に発表した研究はすでに古典となりつつあり、2000年代にはアメリカ合衆国の哲学者ジョン・サリスが、プラトンから、ライプニッツ、ヘーゲル、ニーチェを経て現代に至る哲学的翻訳論の歴史を辿り直す研究書を刊行している(John Sallis, *On Translation*, 2001)。

本研究代表者は、研究開始までに、ハイデガーにおける翻訳思想を主題として研究を遂行するとともに、20世紀のドイツおよびフランスにおいて、言語活動を通じての思考の変革可能性を巡る問いを提起した思想家たち(バタイユ・ブランショ・レヴィナス)に関する研究を遂行してきた。このような研究の目的は、哲学・思想史のダイナミズムの源泉としての「翻訳」という事象を、20世紀に絞り、とりわけフランス・ドイツという二つの文脈を横断しながら調査・検証することにあった。しかしながら、思想翻訳に関する研究を継続するにあたり、次の問いの包括的な解明が未着手であることが明らかになった。すなわち、翻訳の思想がいかなる歴史哲学的な思考を前提としているか、という問いである。翻訳が歴史性の問いに向き合うのは、起点となる言語が古典語の場合であったり、あるいは古い翻訳が新たに改訳される場合だけに限られるわけではない。むしろ言語とは歴史的に生成変化する存在であり、翻訳は、潜在的にも顕在的にも、こうした言語の生成変化に巻き込まれ、あるいはそこに介入する力を有していると言えるのではないだろうか。19世紀以来萌芽的に形成され、20世紀に多様に展開した翻訳思想は、こうした翻訳の歴史性に対して意識的であった。この点に関してはフィリップ・ラクー＝ラバルトが先駆的な研究を発表しているが(Philippe Lacoue-Labarthe, *L'imitation des modernes*, 1985)この方向性を引き継ぎながら20世紀の翻訳思想と歴史哲学との関連を精査する作業が必要となった。

2. 研究の目的

以上の研究状況に基づき、本研究は、20世紀のフランス・ドイツで多様に展開した翻訳思想が、(1)いかなる仕方で歴史性を巡る問いを前提とし、主題化したのか、また、ひるがえって、(2)「歴史」の概念および歴史性そのものを批判する可能性を生じさせたのかを明らかにすることを試みる。(2)には、いかにして翻訳思想が、人文学の諸領域における歴史研究によって前提とされた歴史性の概念を批判・吟味しうるのかを解明する作業が含まれる。

3. 研究の方法

本研究は、第一に、20世紀の哲学において提起された翻訳の問いと、翻訳をめぐる思弁的考察を、フランス思想とドイツ思想の境界を横断しながら検証した。ところで、20世紀における「翻訳の思想」の母胎として、19世紀以来の文献学および言語理論の進展が果たした決定的な役割は看過しがたい。こうした事態に着目し、本研究は第二に、哲学、文学、文献学、言語学、解釈学、神学といった多様な知が交差する領域において「翻訳」に関する思弁がいかなる形で展開したのかを析出するという方法を採用した。

4. 研究成果

研究成果は以下の3点にまとめられる。

(1) 哲学における翻訳と歴史性の問い

本研究は、第一の軸として、20世紀ドイツ・フランスの哲学における翻訳の問いと歴史性の概念の関連を吟味した。その際の出発点となったのはハイデガーの思想であり、そこから抽出された歴史性の概念に関連するいくつかの重要な概念、すなわち生、時間性、事実性といった概念抽出であった。

まず、「生」と「時間性」に関しては、これらの概念をめぐるハイデガーの問い直しが、20世紀の「生の哲学」の潮流との対峙のなかで遂行されたことがすでに知られている。とりわけ、現象学運動の展開に多大な影響を与えたアンリ・ベルクソンの「生の哲学」を吟味・批判することは、ハイデガーが自らの時間性の哲学を構想するにあたって重要な意味を持っていた。ここでハイデガーがベルクソンと対峙すると同時に、アリストテレスの時間概念へと立ち返り、その時間論を《翻訳》するという作業を遂行している点を見逃すことはできない。このことが意味するのは、ハイデガーがベルクソンの思想を書き換え、あるいは《翻訳》すると同時に、

哲学の歴史全体を総括し、そうすることで翻訳をめぐる思考を開始しているということである。ハイデガーにおける時間概念の問い直しは、まさしく、翻訳の歴史機能をめぐる思弁 歴史的な連続性を確立するとともに、そこに非連続性と断絶を刻み込み、ひいては過去と現在に対する批判的関係を生じさせるという機能をめぐる思弁 をその核心に内包している（以上の考察の成果は「生・時間・連続性：ハイデガーのベルクソン解釈」『西日本哲学年報』第25号として公表した）。

次に、「事実性」の概念に関しては、その哲学的背景のみならず、神学的・政治哲学的背景も含めて検討する必要があるが、本研究は、差し当たってその哲学的な意義を解明することに着手した。20世紀の哲学における思弁的翻訳論が「事実性」という概念に着目したとすれば、その背景には、哲学が翻訳をめぐる問いかけを通じて、現在という歴史的時間に実践的・能動的に関与し、それを変容させようという認識が存在していた。本研究は、こうした認識を明示的に表明した哲学者として、三木清の事例を調査した。三木は「事実性」の概念を歴史の基本的カテゴリーとして位置づけることによって、独自の歴史哲学を構想したのだが、ここにはフランス・ドイツの双方の思想の同時代的な受容・展開が見いだされるとともに、20世紀の思弁的翻訳論の様態が映し出されてもいる（この成果は *Philosophy Today* 誌にて公表した）。

（2）人文諸学と哲学：思弁的翻訳論を媒介として

本研究は、第二の軸として、翻訳をめぐる哲学的な問いがいかんして人文諸学における歴史性の概念を批判的に捉え返すとともに、諸領域を媒介する役割を果たしたのかを考察した。

まず、（1）において検討した事実性の概念をとりあげ、その神学的背景と、哲学および神学の関心の一致と齟齬を考えねばならない。そのために、ハイデガーにおける事実性の概念と、新約聖書学者ルドルフ・ブルトマンにおける直説法と命令法の時間性 終末論的時間性をめぐる解釈とを対比させることが有効な方法となる。こうした作業の成果は、「汝が在るところのものに成れ」：断片の実存論の可能性に向けて」として口頭発表した。また、ここから派生した研究として、イメージと言語の相互翻訳の可能性および、その歴史哲学的・神学的背景を探った（シンポジウム「絵を見る 絵を読む」を開催。口頭発表「*veritas filia temporis*」）。

次に、本研究は、19世紀における歴史諸科学の隆盛のなかで発展した古典文献学および言語学がいかなる仕方で思弁的な翻訳論の可能性を内包し、そして20世紀の哲学が、古典文献学および言語学のもたらした知見に対してどのように応答したのかを考察した（その成果は、「翻訳不可能なリズムをめぐる：ハイデガーによるアリストテレス読解の一側面」『現代思想』第46巻3号として発表されている）。その結果、20世紀の思弁的翻訳論の歴史哲学的前提を考える上で、「人間にとって言葉を話すことの経験がいかなる歴史哲学的意義を有するのか」という根本的な問いへと立ち返る必要性が浮上した。この問いは、哲学と文学の接しあう領域において提起される究極的な問いの一つであり、本研究は、この問いに正面から取り組んだ稀有な思想家としてモーリス・ブランシの思想に着目した（この研究成果はブランシの著作『終わりなき対話』[共訳]の翻訳出版および解説執筆という形で世に問うた）。

（3）総括

（1）・（2）の研究を総合して、最終年度においては、20世紀の哲学と文学が翻訳をめぐる思弁を展開するうえで共通の地盤とした悲劇論の文脈に遡行し、そこから研究を俯瞰した。アリストテレス『詩学』以来の悲劇的なものの解釈の伝統を現代の思弁的翻訳論が継受し、刷新しているとすれば、悲劇的なものと歴史性をめぐる思考とのあいだにはいかなる連関が想定されうるのだろうか。2018年7月に開催されたシンポジウム「実存の悲劇的根底」においては、近代における古代悲劇の翻訳という企てがいかなる歴史性を孕むのか、そして、悲劇翻訳の歴史性を思考することを通じて、アリストテレスの「理論」がいかなる仕方で変容をこうむり、新たな地平を獲得したのかを討議した（「ヘルダーリンの「ソフォクレス註解」における悲劇的なものと歴史の理論」『フィロソフィア』第106号）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

西山達也、ヘルダーリンの「ソフォクレス註解」における悲劇的なものと歴史の理論、フィロソフィア、査読無、第106号、2019年、19-42頁

西山達也、翻訳不可能なリズムをめぐる：ハイデガーによるアリストテレス読解の一側面、現代思想、査読無、第46巻3号、2018年、241-253頁

西山達也、「示されているものへとむかう存在」、Zuspiel、査読無、2017年、第1号、167-177頁

西山達也、生・時間・連続性：ハイデガーのベルクソン解釈、西日本哲学年報、査読無、第25号、2017年、95-115頁

NISHIYAMA, Tatsuya, Facticity and Poetics in History: Miki Kiyoshi's Reading of Heidegger, *Philosophy Today*, 査読無, Vol. 60, Issue 4, 2016, p. 893-910

〔学会発表〕(計7件)

西山達也、レヴィナスのプラトン主義について、ジェラルド・ベンスーサン教授講演会「わ

れら善にして義なる者たち！」での提題、2018年10月26日、早稲田大学

西山達也、悲劇的なものと歴史の媒介作用、早稲田大学哲学会シンポジウム「実存の悲劇的根底」、2018年7月7日、早稲田大学

西山達也、示されているものへとむかう存在、『存在と時間』刊行90周年記念シンポジウム、2017年11月25日、青山学院大学

西山達也、経験に釣り合う忘却：『終わりなき対話』第2部、日本フランス語フランス文学会バタイユ・ブランショ研究会、2017年6月3日、東京大学駒場キャンパス

西山達也、「汝が在るところのものに成れ」：断片的実存論の可能性に向けて、西南学院大学国際文化学部談話会、2017年03月01日、西南学院大学

西山達也、生・時間・連続性：ハイデガーのベルクソン読解、西日本哲学会第67回大会、シンポジウム「生の哲学」再考：ハイデガーとベルクソン、2016年12月04日、熊本学園大学

西山達也、veritas filia temporis、西南哲学会シンポジウム「絵を見る 絵を読む」、2016年10月23日、西南学院大学

〔図書〕(計2件)

〔翻訳および解説執筆〕終わりなき対話 II：限界-経験(原著者：モーリス・ブランショ) 訳者：湯浅博雄、岩野卓司、上田和彦、大森晋輔、西山達也、西山雄二、筑摩書房、2017年、p. 9-51, 288-301, 358-400, 456-461, 469-473 を翻訳担当、解説執筆、総487頁

〔翻訳〕終わりなき対話 III：書物の不在(原著者：モーリス・ブランショ) 訳者：湯浅博雄、岩野卓司、郷原佳以、西山達也、安原伸一郎、筑摩書房、2017年、p. 155-175, 313-316 担当、総350頁

〔その他〕 なし

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

研究代表者 氏名：西山 達也

ローマ字氏名：(NISHIYAMA, Tatsuya)

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：文学学術院

職名：教授

研究者番号：40599916